

## 現代宗教研究における現象学的社会学の意義

著者	諸岡 了介
雑誌名	論集
巻	30
ページ	1-15
発行年	2003-12-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00129794">http://hdl.handle.net/10097/00129794</a>

# 現代宗教研究における現象学的社会学の意義

諸岡了介

## 一 はじめに

本稿の狙いは、現代宗教の研究に対して現象学的社会学の視点が有する意義と可能性を明らかにすることにある。宗教社会学における現象学的社会学の視点の導入の試みとしては、トーマス・ルックマンの『見えない宗教<sup>①</sup>』やピーター・バーガーの『聖なる天蓋<sup>②</sup>』がその先駆として著名であるが、それ以後は目立った進展はみていない。こうした試みを進めるにあたって、この両研究の検討からはじめることが有益であろう。

これまで、ルックマンとバーガーの理論はふたつの異なる文脈において注目され論じられてきた。そのひとつは現象学的知識社会学の一般的な枠組みに関する議論の文脈であり、もうひとつは宗教社会学におけるいわゆる世俗化論の文脈である。こうした中、前者の文脈においては両者の共著『現実の社会的構成<sup>③</sup>』に示されている一般的な理論的枠組みのみが取り上げられ、逆に後者の文脈においては彼らの現代宗教論の是非を実証的証拠との照合から断じる向きが多く、彼らの現象学的社会学を援用した理論的枠組みと、現代宗教論の内容との間の内的な関連についてはほとんど論じられてきていない<sup>④</sup>。特に宗教社会学の分野では、近現代社会における宗教の衰退や消滅を論じるものとしての世俗化論というレッテルが、新たな理論的視点の導入の試みとしての側面から彼らの理論を検討することを妨げてきたのだと思われる<sup>⑤</sup>。本稿では、こうした傾向をこえて、ルックマンやバーガーの宗教論の理論構成を再検討することで、現代宗教の研究における現象学的社会学の視点の導入に一定の必然性が存していることを示すとともに、そこから望まれるさらなる展開の方途を明らかにしたい。

## 二、バーガーおよびルックマンの現代宗教論の問題関心

バーガーやルックマンの宗教論を検討するにあたってまず最初に留意すべきことには、他の現代の宗教状況を扱った宗教社会学的考察の多くと同様、彼らの理論は、宗教とは何か、近代性とは何かといった一般的な考察や定式化を最初から一義的にめざしたものであるというよりも、むしろ近現代社会とりわけ現代西洋社会の内に見いだされる特定の問題の状況への関心から発しているものとして解されることである。したがってまずは、それぞれの根本的関心が向けられている問題の状況がどんなものであるかを示すこととしたい。

バーガーの現代宗教論の場合、その根本的関心が向けられている状況とは、生の意味の確かさの喪失や「安住の地の喪失 (homelessness)」として表現される、人間個人がその生に対して感じる一種独特の不安定さの広まりである。<sup>⑥</sup> こうした状況は、次のように、近現代社会の特徴である多元主義 (pluralism) の帰結として理解されている。近現代社会における経済・政治その他の諸領域の分化と自律化の進行につれ、どんな宗教も社会の内に独占的な位置を占めることのできない、複数の宗教が並存し競合する宗教の多元的状況が現れる。こうした社会構造上の宗教の多元化は、宗教を個人的な選択の問題とする (私事化 privatization) と同時に、それぞれの宗教が提示する宗教的世界観の相対化をもたらし、そうした世界観が個人に対してもつ信憑性の減少を導く。このことは、社会的配置の面からしてどんな宗教的世界観も自明で所与の「現実」としては受けとられなくなつたという点において決定的であるとみなされる。結局これら宗教の多元化や相対化は、人々がそれに抛りまたその中に生きる現実世界の多元化や相対化つまり安住の地の喪失を意味するものに他ならないと考えられている。

一方のルックマンの現代宗教論であるが、この主題についても共著を発表しているとおり、宗教の多元化や私事化といった多くの認識をバーガーと共有している。<sup>⑦</sup> しかし、バーガーの問題関心が生の意味の確かさの喪失という、社会制度上の変動が世界観のあり方にもたらしたひとつの特殊な帰結の理解へと収斂するものであるのに対し、ルックマンの問題関心はむしろ

しろ社会制度上の変動に従い世界観のあり方が変化してきているそのこと自体の把握にあり、したがってその変化の内実および行方をも開かれた問いとして扱うものである。ルックマンの現代宗教論では、近現代社会における宗教の多元化やそれに伴う脱独占化や私事化は、新しい形態の宗教や世界観の出現を意味するものと解されている。公的な社会制度からは支持も強制も受けることがなく、基本的に私的な事柄として私的領域内で形成・維持されることを特徴とする「見えない宗教(invisible religion)」と呼ばれるものがそれである。

ここでまず確認されることは、注目する局面に違いはあべりガーとルックマンの理論はいずれも、宗教との関連において近現代社会に特徴的とみなされている、個人における生のあり方と社会制度との関係に生じている変化、ある種の分離の傾向を問題としていることである。両者の宗教論は、この個人と社会の関係への着目という点において、諸種の宗教現象をその制度的・集団的側面においてのみ扱う類の宗教社会学的研究とは区別される。現象学的社会学の視点を援用すべき必然性が存しているのもこの点である。それはつまり、現象学的社会学の視点が、人間が生きている「現実」を主観的な意味づけ作用によって成立している意味秩序(ここまで世界観と表現しておいたものにあたる)として捉える一方で、そうした意味秩序の形成・伝達・維持が間主観的(社会的)過程を通じて行われるものとみるものであり、個人の生のあり方と社会制度の関係を主題的・体系的に扱うに適したものであるからである。

なお、現象学的社会学という名称は明確な一般的定義を欠いており、異なるいくつかの理論的潮流に対して用いられているが、ここでは基本的にアルフレッド・シュッツの理論の影響下にある流れを指示する用法に従っている<sup>(8)</sup>。しかし、しばしばなされているように、ルックマンやバーガーの理論の総体を現象学的社会学として括することは、それらがシュッツの影響を受けているということを示唆する以上の意味をもたないし、また彼らの理論がどこまで本当に現象学的社会学の立場を貫き通しているかという点についても疑問が残る。したがって本稿では、現象学的社会学という名称を理論の総称としてでは

なく、次のように定義される特定の視点に対して、すなわち、シュッツの理論を下敷きにし、主観的・間主観的に構成された意味秩序の内に生きるものとしての人間主体との関連の内に社会的現象を捉える視点に対して用いることとしたい。

### 三 バーガーおよびルックマンの現代宗教論における現象学的社会学の視点の導入

続いてはバーガーとルックマンの宗教論についてより詳しく、どのように現象学的社会学の視点が用いられているのかを確認しておきたい。まずバーガーの現代宗教論においては、現象学的社会学の視点が有意に用いられているのは、その根本的問題関心である個人にとつての生の意味の確かさの喪失が社会制度上の宗教の多元化から導かれるそのメカニズムを示す上であるが、そのかぎりにおいてもある。バーガーの理論構成においては基本的に、個人が主観的に有する意味秩序は社会的・間主観的に蓄積され提供される意味秩序との合致によつて維持されるものとみなされており、それ以上は個人における意味秩序の構造や動態は追求されていない。個人が主観的に有する意味秩序の確かさは、それを支持する社会的基盤すなわち「信憑性構造 (plausibility structure)」の大きさと強さの関数であり、意味秩序に関する変化は、最終的にはその社会的基盤の変化に帰せられる。こうした見方は、個人が有する意味秩序が社会的過程を通じて伝達され維持されるという現象学的社会学の視点をもたらすひとつの洞察に基づいたものである。

こうしたことは、宗教そのものの理解についても当てはまる。バーガーの理論において宗教がもつ重要性は、ある意味秩序を宇宙の秩序そのものとみなさしめるその独特の正当化機能 (コスモス化 *cosmization*) の内に求められているが、その有効性を左右するものもまた結局のところはその社会的基盤の大きさとみなされており、個人における宗教のあり方の変化は宗教の社会的基盤の変化と呼応する相においてのみ捉えられている。つまり、宗教は意味秩序の社会的な提供者・支持者としての面から把握されるにとどまっている。こうした理論構成は、確かさの喪失という個人における宗教のあり方の特定の

変化を、現象学的社会学の視点を導入することでそれとの関係が明らかにされた社会的要因から説明することを可能にするものであり、バーガーの問題関心に沿うものである。しかし、意味秩序の一般的構造や動態についてはその一面のみが解釈の枠組みとして固定化され前提されていて、それを問題として追求すべき現象学的社会学の視点の導入としては限定的だといえる。

いわゆる「実体的」定義を標榜しそもそも宗教の定義の問題をあまり重視していないバーガーに対し、その宗教論の中で意欲的な宗教の再定義を試みているのがルックマンである。ルックマンの宗教の理解ならびに定義は、人間個人がその中で生きる主観的に形成・保持される意味秩序としての個人レベルの宗教と、さまざまな制度的形態の下で提示され社会的あるいは歴史的に維持・伝達される意味秩序（ルックマンはこれに「世界観（world view）」の語をあてている）としての社会レベルの宗教との二つの水準にわたっている。<sup>⑩</sup> ルックマンは、それが人間が単なる有機体、生物学的存在であることを超えることを意味するとして、意識とりわけ自己意識をもつことの内に根源的な宗教性をみだし、それがあらゆる宗教現象の一般的根拠をなすとみなしている。言い換えれば、人間個人が主観的に有する意味秩序それ自体が宗教的性質を有するものと規定されているのである。これまで、こうした個人レベルの規定だけを取りあげて、自己意識をもつことを宗教的とするのは宗教の定義としては広すぎて意味をなさないといった類の批判がしばしばなされてきた。<sup>⑪</sup> しかし、ルックマンの宗教論が個人レベルにおいてのみ宗教を扱っているのではなく、むしろそれとの関係における社会レベルの宗教つまり宗教の制度的形態の分析に重点をおいていることを考慮すれば、その宗教の定義もまた個人レベルの規定を単独で取りあげるのではなくて、社会レベルでの規定や具体的な分析全体との関連において理解する必要がある。

このような二つの水準にわたるルックマンの宗教の定義は、現象学的社会学の視点から引き出される次のような洞察に基づいているとみることができる。すなわち、個人がその中で生きているところの意味秩序の形成や維持に際しては社会的

(間主観的)過程が決定的な役割を果たしているが、それと同時に個人の主観的過程における意味秩序の動態は社会的過程に還元されない自律性を有してもおり、両過程における動態は異なつた原理にしたがうものとして区別されねばならないという洞察である。諸個人が宗教制度から距離をおいてそれぞれに形成・保持している見えない宗教という現象の理論化も、こうした洞察を宗教の定義に組み入れることで可能になっている。こうしてみると、バーガーの理論が現象学的社会学の視点やそこから得られる認識を前提的見解として組みこむにとどまって、宗教概念自体の根本的な再構成にまではいたっていないのに対し、ルックマンの理論は社会制度と個人の生の関係の主題化という点について宗教の定義にまで現象学的社会学の視点の適用を試みたものだといえよう。

#### 四、現代宗教研究における宗教の定義の問題

こうしたルックマンの試みについて、先述のとおりに彼が関心を寄せている現代的状況の把握に現象学的社会学の視点が適しているとしても、それを宗教の定義そのものの内に組みこむことの妥当性はなお問われるであろう。この妥当性の問題は、つまるところ、宗教の定義の内に現象学的社会学の視点をもちこむことで新たに捉えられた事象、つまり特には見えない宗教に関する一連の事象が、正当に宗教の名の下に括りうるものであるか否かという問いにも等しい。

ルックマンによれば、近現代を特徴づけている私事化された宗教の社会的形態すなわち見えない宗教とは、典型的には、諸個人が社会の内に提供されている諸表象をそれぞれに取捨選択し、それらを一つの意味秩序へとまとめあげたものである。<sup>12)</sup> こうした意味秩序の形成のしかたは「個人的シンクレティズム(individual syncretism)」「私事化されたシンクレティズム(privatized syncretism)」「個人的ブリコラージュ(individual bricolage)」「主観的ブリコラージュ(subjective bricolage)」等とも形容されている。その主題となる表象やその源泉としてルックマンが具体的に挙げているものは、いわゆる伝統的な宗教的

諸表象の他、社会主義的あるいは国家主義的諸表象、個人の自律性や自己実現の理想、マイホーム主義といったものや、エロジー思想、ポジティブ・シンキング、通俗的心理学、東洋の神秘主義思想、占星術、生体エネルギー学、瞑想の技法等、非常に多岐にわたっている。実際、果たしてこうした主題の寄せ集めがどこまで宗教と呼ぶに値するかについては、まさに先からの宗教の定義の問題とあわせて、收拾しがたく意見の分かれるところである<sup>13)</sup>。

しかしこの問題は、是か非かどちらか一方に断じられるべき種類のものではないように思われる。むしろ、見えない宗教という語があてられている諸現象が、従来のな宗教理解からしては宗教であるともないとも定めがたく、いずれにしたところで議論の余地が残るという事実こそが重要である。つまり、どんな解釈の下であれ、こうした諸現象が経験的に確認されるものであるかぎりにおいては、それが容易に割り切れないということは、既存の宗教の理解や定義それ自体の限界を意味しており、単にそこへ無理に押しこめてすまされるべきことではない。

そもそも、ルックマンの宗教論だけでなく宗教研究一般において、宗教の定義とは研究対象としての宗教現象を画定しそれを理解するための方法論に属するもの、つまり理解のための道具であると同時に、宗教現象とは何であるかという理解そのものでもあるはずである。しかし現代宗教を扱った最近の宗教社会学的研究においては、宗教の定義は主に方法論の問題としてのみ捉えられ、ひとつの研究の主題たる宗教の理解としての面は軽視され見逃されたり、宗教社会学の埒外のこととして正面きって論じることを避けられる傾向にある。こうした傾向は逆に、宗教の定義をめぐる議論を非生産的な混乱に陥らせ、また宗教概念そのものの根本的な問いなおしを伴わない「〇〇宗教」という下位範疇の乱立をもたらすこととなっている。宗教の定義について議論が生じるということは、必ずしも宗教社会学の方法論上の混乱や恣意性を意味しているのではなく、ある面では多様な近現代の宗教状況がいわば境界例としてこれまでの宗教の理解の深化や再考を促していることであらわれでもあり、そこには現代宗教を扱う宗教社会学がその主題として取り組むべきひとつの問題領域が控えていると思



われる。

こうした観点からすれば、ルックマンの宗教の定義さらには宗教論の全体は、彼が見えない宗教という言葉の下に注目する近現代的な現象に照らして、新たな宗教理解の提示を試みたものとして解釈することができる。ここにいたって、先述のとおりにそうした経験的事象の理解に際し有意であるかぎりにおいて、宗教の定義に現象学的社会学の視点を導入することにも一定の必然性と積極的な意味とがみいだされることとなる。結局、制度的な側面からだけでは捉えきれない「見えない」宗教、私事化された宗教なる事象の問題は、すべて社会的な現象でもあると同時に個人的な事柄でもあるという宗教現象の一般的性質の近現代的な現出ともみなされよう。そうだとすれば、現象学的社会学の視点は、個人の生のあり方と社会制度の分離傾向という近現代に特殊な状況の説明をこえて、宗教の一般的理解に対しても寄与しうるところがあろう。

特に近年の西欧の宗教社会学では、現代社会における非組織的・教会外的な宗教性に注目した多くの理論や概念が提示されているが、それらと比しても、単なる現下の現象の指摘だけではなく宗教理解の再検討を含んでいること、逆に現代的な現象や状況を一樣に一般的問題に還元してしまわないこと、教会外的な宗教性や個人的宗教性をだけではなく、それを宗教制度や宗教集団のレベルでの動態との関連の内に体系的に扱いうること、こうした特色について現象学的社会学の視点をを用いたルックマンの宗教論は今なお際だっている。

## 五、今後の展望

ここまで、バーガーやルックマンがそれぞれに近現代的な宗教状況の理解において現象学的社会学の視点を活かしていること、またとりわけルックマンの宗教論は単に近現代的状況をそれとして理解するだけにとどまらず、そこから宗教の定義そのものを捉えなおす試みとしてみなしうることを論じてきた。ただし、ここで行ったのは一種の読み替えであり可能性の

提示であつて、現代宗教研究における現象学的社会学の視点の活用に関するこうした方向への展開は、彼ら自身によつては必ずしも明確に意図されているものではない。最後に、今後それをさらに押しすすめる上で焦点となるべき問題を示唆しておきたい。

求められることは、意味秩序の社会諸制度内における側面と個人主観における側面のそれぞれと、両者の関係の把握をより深め、それを明示的・体系的に整理してゆくことである。たとえばバーガーの宗教論についていえば、そこでは基本的に宗教的な意味秩序は、死の存在を念頭においた生への思念的な意味づけとして、論理的整合性の法則に従つて組み立てられているものと理解されているが、宗教集団等において死に関する教義が形成され蓄積・伝達されてゆくときの整合性の保ちかたと、信徒がその教義を参照しながら自分なりの人生観を形成してゆくときの整合性の保ちかたを、つまり意味秩序の社会集団内における動態と個人主観における動態を区別し、その上で両者の関係を把握する必要がある<sup>(18)</sup>。ルックマンの宗教論では、現代に私事化された見えない宗教が存在するとしても、具体的に諸個人においてそれがどのようにひとつの意味秩序として組み立てられているかについてはほとんど論じられていない。それがいかなる意味において宗教と呼ぶものなのかを明らかにする上でも、個人における見えない宗教の構成のされ方を実証的に探ることを通じて、個人主観での意味秩序の構造と動態とを深く探求することが求められよう。こうした問題領域に関する一般的な議論は、シュッツが「自然的態度(natural attitude)」の問題として先鞭をつけたところのものである。特に、非制度的な宗教性を主題としようとする向きにとつては、個人主観における意味秩序の動態を扱うことは避けて通れないものと思われる。

個人主観における意味秩序の動態を問う上でポイントとなるのは、経験という要素の見なおしであろう。この点に関して興味ぶかいのは、バーガーとルックマンが研究を進めてきたなかで、それぞれに超越的な経験への関心を強めてきていることである。しかしバーガーにおいては、超越的経験あるいは「超自然的なものを経験」への着眼は、その社会的な宗教論

には十分に反映されずむしろ神学的な著作の中に展開されている<sup>①7</sup>。他方のルックマンは近年、現象学的社会学の視点を援用しながら超越経験の類型を立て、現代におけるその変容を論じている<sup>①8</sup>。そこでは、人間の経験が常に、単に目下の瞬間や目に入る空間の内のみにはとどまらず、それを超えた範囲の時空間との関係において解釈され経験されることに基づく「小規模な超越 (little transcendence)」、個人主観に対する他者の存在や社会集団、社会的事象の超越性に基づく「中規模な超越 (intermediate transcendence)」、夢や脱自状態等を含め、日常的現実に対する他界的 (other-worldly) な現実に関わる「大規模な超越 (great transcendence)」と云う超越の幅 (span of transcendence) に応じた三種の超越経験が区別されている<sup>①9</sup>。その上でルックマンは、現代社会においては、天国や地獄といった大規模な超越に関わる表象よりも、国家、家族、他者との関わりといった中規模な超越に関わる表象が好まれるようになり、さらには自己実現や精神的分析的モチーフのような小規模な超越に関わる表象が卓越してきていると論じている。

こうした議論は、現代的現象の指摘としてはともかく、宗教理解を深めることを念頭においた意味秩序構成の契機としての経験の分類としては十分に吟味されたものとはいえない。たとえば、「超越の幅」の意味するところや、大・中・小という序列設定の妥当性はよく問われるべきである。ここでの関心からすれば、超越的経験の理解は、意味秩序の動態の中でその役割や影響力の面から進めてゆくべきであろう。しかしながら、ルックマンやバーガーが超越的な経験に着目するにいたったということ自体が、現代社会における宗教のあり方を理解する上で、社会制度や宗教集団をだけでなく個人主観における意味秩序の動態やそこにおける経験といった契機までを見なおし考えなおすことが求められていることをあらわしているようにも思われる。

通時的・歴史的には近現代という時代に帰せられるところの大きな変動を経、共時的には異なる文化間の接触がますます頻繁かつ密となっている現在の社会情勢において、現代宗教研究がここに広く有効な宗教概念を設定しえるとすれば、それ

は同時にすぐれて人間の生の一般的構造における宗教理解に近づいたものとなる。現象学的社会学の視点は、現代宗教研究がなすべきこうした宗教理解の錬磨に際して大きな可能性を有するものと考えられる。

\*付記 本研究は東北大学二十一世紀COEプログラム「社会階層と不平等研究教育拠点」のCOE特別研究奨励費を受けて行ったものである。

〈キー・ワード〉 現代宗教、現象学的社会学、ルックマン、バーガー

## 注

- (1) Thomas Luckmann, *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*, New York and London: The MacMillan Company, 1967. T・ルックマン(赤池憲明・J・スインゼード訳)『見えない宗教——現代宗教社会学入門』ヨルダン社、一九七六年。
- (2) Peter Berger, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*. New York: Anchor, 1980 (1967). P・バーガー(蘭田稔訳)『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』新曜社、一九七九年。
- (3) Peter Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. New York: Doubleday, 1966. P・バーガー・T・ルックマン(山口節郎訳)『日常世界の構成——マイテンティティと世界の弁証法』新曜社、一九七七年。
- (4) 現代宗教社会学史におけるルックマンとバーガーの理論的位置については、James A. Beckford, "The Sociology of Religion 1945-1989," *Social Compass* 37, 1, 1990. また、バーガーらの私事化論を取りあげ現象学的社会学の視点との関連の内に論じたものとしては、那須壽『現象学的社会学への道』、恒星社厚生閣、一九九七年を参照のこと。
- (5) 近年バーガーは、反世俗化論の潮流の中で自身の世俗化論が誤りであったという旨の発言を繰り返しているが、以前発表した理論のすべてを否定しているのではなくその核心部分については自説を固持している。いずれにせよ筆者は、バーガーの理

論に欠点や不備をだけでなく活かすべき一定の意義を認めるものである。これらの点に関するより詳しい議論については、拙稿「P・バーガーの宗教論の視座構造」、『文化』第六六巻、第一・二号、二〇〇二年を参照されたい。

- (6) ここでの記述は前掲書『聖なる天蓋』の他、これとほぼ同一の理論的背景の下に近現代的意識一般の特徴について考察している次の著作を援用した。Peter Berger, Brigitte Berger, Hansfried Kellner, *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*. New York: Vintage Books, 1974 (1973). P・バーガー、B・バーガー、H・ケルナー（高山真知子、馬場伸也、馬場恭子訳）『故郷喪失者たち——近代化と日常意識』、新曜社、一九七七年。

- (7) 現代宗教に関するルックマンとバーガーの共同の著述としては、Peter Berger and Thomas Luckmann, "Secularization and Pluralism," *International Yearbook for the Sociology of Religion* 2, 1966; *Modernity, Pluralism and the Crisis of Meaning: The Orientation of Modern Man*. Gutersloh: Bertelsmann Foundation Publishers, 1995.

- (8) 現象学的社会学の定義については、山口節郎「現象学的社会学」、木田元他編『現象学事典』、弘文堂、一九九四年、および張江洋直「シュッツと解釈学的視座」、西原和久編著『現象学的社会学の展開』、青土社、一九九一年を参照のこと。

- (9) バーガーの宗教の定義に関する見解については、前掲書『聖なる天蓋』巻末の「補論I」の他、Peter Berger, "Some Second Thoughts on Substantive versus Functional Definitions of Religion," *Journal for the Scientific Study of Religion* 13, 5, 1974を参照のこと。
- (10) ルックマンの宗教の定義はさらに細かく分類することもあるが、本稿では必要以上に立ち回ることをしなす。J・スウィングドロー「ルックマンにおける宗教社会学の基本構造」、前掲訳書『見えない宗教』、一八七〜二〇一頁ならびに同著者『「和」と「分」の構造』、日本基督教団出版局、一九八一年、六四〜六六頁を参照されたい。

- (11) バーガーによるルックマンの宗教の定義への批判は注9に示した論文の内に見られる。他にこつしたルックマンの定義への批判の内主なものとしてRoland Robertson, *The Sociological Interpretation of Religion*. New York: Schocken Books, 1972 (1970), pp. 39-43. R・ロバートソン（田丸徳善監訳、井上順孝、対馬路人、古原和男、渡辺雅子訳）『宗教の社会学——文化と組織としての宗教理解』、川島書店、一九八三年、三六〜三九頁。Karel Dobberaere and Jan Lauwers, "Definition of Religion: A Sociological Critique," *Social Compass* 20, 4, 1973; Rodney Stark and William S. Bainbridge, *The Future of Religion: Secularization, Revival, and Cult Formation*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1985, pp. 3-5; Seymour M. Lipset, "Comments to 'The New and the Old in Religion,'" in Pierre Bourdieu and James S. Coleman eds. *Social Theory for a Changing Society*. Boulder, San Francisco, Oxford: Westview Press; New York: Russel Sage Foundation, 1991. 最近では、住家正芳「宗教概念と世俗化論」、島園進・鶴岡賢雄編『《宗教》再考』、ベリかん社、二〇〇四年もまたこれと同型のルックマン批判を行っている。

- (12) この記述では、前掲書『見えない宗教』の他、次の文献も参考にした。なおルックマンは、本人も繰り返し述べていると

おり、後に取りあげる超越の縮減に関する議論を展開させている他は、基本的に『見えない宗教』に提示した見解をその後も堅持している。"The Structural Conditions of Religious Consciousness in Modern Societies," *Japanese Journal of Religious Studies* 6, 1-2, 1979. (対馬路人訳) 「近代社会における宗教意識の構造的條件」、『CIESR 東京会議紀要』一九七九年。"Shrinking Transcendence, Expanding Religion?" *Sociological Analysis* 50, 2, 1990: "The New and the Old in Religion," in Pierre Bourdieu and James S. Coleman eds. *Social Theory for a Changing Society*. Boulder, San Francisco, Oxford: Westview Press, New York: Russel Sage Foundation, 1991; "Privatization of Religion and Morality," in Paul Heelas, Scott Lash and Paul Morris eds. *Detraditionalization*. Oxford: Oxford University Press, 1996.

- (13) 注11に挙げた文献の他、肯定的な見解の例としては Andrew Greely, *Unsecular Man: The Persistence of Religion*. New York: Schocken Books, 1985 (1972); Hubert Knoblauch, "Europe and Invisible Religion," *Social Compass* 50, 3, 2003. 否定的な見解については Bryan Wilson, *Contemporary Transformations of Religion*. London: Oxford University Press, 1976, p. 4; Seymour M. Lipset, op. cit.; Roberto Cipriani, "Invisible Religion or Diffused Religion in Italy?" *Social Compass* 50, 3, 2003. 保留の姿勢を見せつつあるものとして Roland J. Carpiche, "L'individualisation constitue-t-elle encore le paradigme de la religion en modernité tardive?", *Social Compass* 50, 3, 2003.

- (14) 見えない宗教の存在の経験的証拠については、これを広く理解して先に列挙した主題の社会的分布の広さを示すものとするならば、少なくとも欧米諸国における調査研究は数多い。特にルックマンの議論を意識した上での調査として代表的なものとして Richard Machalek and Michael Martin, "Invisible Religions: Some Preliminary Evidence," *Journal for the Scientific Study of Religion* 15, 5, 1976 がある。"ヨーロッパにおける見えない宗教"という特集を組んだ *Social Compass* 50, 3, 2003 に掲載された諸論文で Keith A. Robert, *Religion in Sociological Perspective*. 2nd ed. Belmont: Wadsworth, 1990, pp. 349-352 も参照された。

- (15) 紙面の都合上、個別に取りあげて検討するつもりではないが、この点を頭にはっきりさせるのは次のような諸論考である。Robert Towler, *Homo Religiosus: Sociological Problems in the Study of Religion*. London: Constable, 1974; Edward Bailey, "Implicit Religion: A Bibliographical Introduction," *Social Compass* 37, 4, 1990; "The Implicit Religion of Contemporary Society: Some Studies and Reflection," *Social Compass* 37, 4, 1990; Grace Davie, "Believing without Belonging: Is This the Future of Religion in Britain?" *Social Compass* 37, 4, 1990; Roberto Cipriani, op. cit. De la religion diffuse à la religion des valeurs. *Social Compass* 40, 1, 1993. タウラーの宗教論については「華園聴塵「欧米における "popular religion" の研究動向」」岡田重精編『日本宗教への視角』、東方出版、一九九四年および「庶民信仰」概念の周辺」、『東北大学文学部研究年報』第四八号、一九九八年を、右の諸岡の概説としては岩井洋「欧米における『民俗／民衆宗教』概念の諸相」、『國學院大學日本文化研究所紀要』第六八輯、一九

九一年を参照のこと。この流れの内に、バーガーの理論との類似性を有しその展開ともみなしうる注目すべき理論としてD・エルヴェレ・ジェールのものがあるが、これについては稿を改めて論じることにした。Daniele Hervieu-Leger, *Religion as a Chain of Memory*. New Brunswick: Rutgers University Press, Trans. Simon Lee, 2000 (1993).

(16) この点についてより詳しくは、前掲の拙稿を参照されたい。

(17) Peter Berger, *A Rumor of Angels: Modern Society and the Rediscovery of the Supernatural*. New York: Anchor Books, 1970 (1969). p. バーガー(荒井俊次訳)『天使のうわさ——現代における神の再発見』ヨルダン社、一九八二年。Peter Berger and Hansfried Kellner, "On the Conceptualization of the Supernatural and the Sacred," *Dialog* 17, 1978. p. バーガー(森下伸也訳)『癒いとしての笑ひ——ヒーター・バーガーのユーモア論』新曜社、一九九九年。

(18) この議論の初出と思われるのは Alfred Schutz and Thomas Luckmann, *The Structures of the Life-world*. Vol. 2. Trans. Richard M. Zaner and David J. Parent, Evanston: Northwestern University Press, 1989 (1983). esp. ch. 6. この議論に関し参照した論文として前掲論文 "Shrinking Transcendence, Expanding Religion?" 1990; "The New and the Old in Religion," 1991; "Privatization of Religion and Morality," 1996 と加えて "Religion and Modern Consciousness," *Zen Buddhist Journal*, 6, 1988; "Nachtrag," *Die unsichbare Religion*, 2. Aufl. Frankfurt: Suhrkamp, 1993 (1991); "The Religious Situation in Europe," *Social Compass* 46. 3; 1999; "Transformations of Religion and Morality in Modern Europe," *Social Compass* 50. 3, 2003.

(19) 小規模な超越は minor transcendence もしくは minimal transcendence とし、中規模な超越は medium transcendence とし表現されている。

## Significance of Phenomenological Sociology for the Study of Modern Religions

Ryosuke MOROOKA

The purpose of this paper is to show the significance and possibility of the viewpoint of phenomenological sociology in the study of modern religious situations. To start with, Thomas Luckmann and Peter Berger's theories of modern religions are examined as forerunning attempts to introduce the viewpoint of phenomenological sociology into the study of modern religious situations.

The viewpoint of phenomenological sociology can treat correctly and systematically the relation of subjective (individual) and intersubjective (social) aspects of a situation. This is relevant for the study of modern religious situations in two senses. First, the viewpoint of phenomenological sociology is adequate to comprehend the characteristic tendency of the modern society toward separation of individuals and social institutions. Second, such a tendency of the modern society requires the sociological study of religion to reconstruct a definition of religion itself, which necessarily implies some reflection on both subjective and institutional aspects in religious phenomenon.

It therefore is important for the study of modern religious situations to develop further a theoretical framework founded on the viewpoint of phenomenological sociology. Such attempt should contribute to a deeper understanding of religious situations in the world today.